〔駒沢女子短期大学　研究紀要　第31号　P.117～128　1998〕

"Oranges and Lemons" の唄の系譜
──「遊び」と「残酷」のマザーグース──

夏　目　康　子

A Study on the Rhymes of "Oranges and Lemons": The Nursery Rhyme of "Play" and "Cruelty"

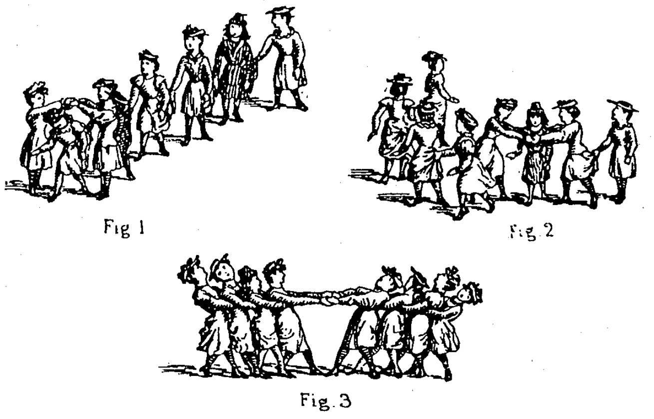
Yasuko NATSUME

Ⅰ．遊び唄としての "Oranges and Lemons" の唄

"Oranges and Lemons"の唄は"London Bridge is Falling Down"の唄と同様、グループで行う遊び唄である。２人の子供が向かい合ってこの唄を歌いながら両手をアーチ型に組み、その下を他の子供達が列を作ってくぐっていく。歌詞にはロンドンの教会が数多く登場し、冒頭の言葉である「オレンジとレモン」の唄として親しまれている唄である。現在最もよく知られている版は「オレンジとレモン」で始まるが、文献に初めて登場した版は異なった出だしで、その他にも時代や地域によって複数の版が存在している。本稿ではさまざまなヴァリエイションを検討しながら、時代による変遷をたどっていく。

まず、どのような遊び唄なのか確認してみよう。Alice Bertha Gomme の *The Traditional Games of England, Scotland, and Ireland*では、イギリス各地で収集した16の版を紹介している。[1)]その後に図入りで、最も一般的な遊び方を紹介している。このGommeの書と、Iona and Peter Opieの *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*によると、次のようなゲームである。[2)]

子供達のうち背の高い２人が、どちらが「オレンジ」でどちらが「レモン」になるかを秘密に決める。それから２人で両手を組んでアーチを作ってこの唄を歌うあいだ、他の子供達が一列になってそのアーチの下をくぐっていく。この唄の最後の部分 "Here comes a candle to light you to bed,/ Here comes a chopper to chop off your head," に近づくと歌うテンポを早め、"Chop, chop, chop, chop, chop!"の最後の"chop"のときにアーチの下にいた子供を両腕を降ろして捕まえる。捕まえられた子供は「オレンジ」になるか「レモン」になるか尋ねられ、選んだ方の子供の後につながり、ゲームと歌は再開され、全部の子供が「オレンジ」か「レモン」のどちらかに属するまで続く。全部の子供が「オレンジ」か「レモン」に決まると、両軍で綱引きをしてどちらが強いか決める。(図版１)



図版１

一方、「ロンドン橋」のゲームは、オーピーの*The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*(以下*ODNR*と略す) によると次のようなゲームである。[3)] ２人の子供が両手をあげて橋を作り、他の子供達がその下をくぐる。唄が終わるときにくぐった者が、降りてきた橋に捕まる。アメリカではこのゲームは綱引きで終わることが多いが、イギリスでは綱引きは一般的ではない。「ロンドン橋」のほうが「オレンジとレモン」よりも単純なゲームであると言える。

「オレンジとレモン」のゲームは「ロンドン橋」のゲームに比べて、オレンジを選ぶのかレモンを選ぶのかという偶然性、綱引きで終わるという競争、さらに歌詞には「首をはねるぞ」という残酷な側面があり、ゲームとしても複雑である。それでは、そもそもなぜ「首をはねる」などという残酷なフレーズが子供の唄に入ってきたのか、この唄の初出文献から検討してみよう。

II．初出文献の "Oranges and Lemons"の唄

この唄が初めて登場する文献は、*Tommy Thumb's Pretty Song Book*, vol. II, (c. 1744)である。[4]（図版２）"London Bells"というタイトルがつけられ、人間が鐘をついている木版画が添えられている。現在流布している唄とはかなり異なった形で登場している。

50
London Bells.
Two Sticks & an Apple,
Ring ẏ Bells at Whitechapple,
Old Father Bald Pate,
Ring ẏ Bells Aldgate,
Maids in white Aprons,
Ring ẏ Bells a St. Cathrines,
Oranges.

51
Oranges and Lemmons,
Ring ẏ Bells at St. Clemens,
When will you pay me,
Ring ẏ Bells at ẏ Old Bailey,
When I am Rich,
Ring ẏ Bells at Fleetditch,
When will that be,
Ring ẏ Bells at Stepney,
When I am Old,
Ring ẏ great Bell at Pauls.

図版２

Two Sticks and an Apple,
Ring the Bells at Whitechapple,
Old Father Bald Pate,
Ring the Bells Aldgate,
Maids in white Aprons,
Ring the Bells a St. Cathrines,
Oranges and Lemmons,
Ring the Bells at St. Clemens,
When will you pay me,
Ring the Bells at the Old Bailey,
When I am Rich,
Ring the Bells at Fleetditch,
When will that be,
Ring the Bells at Stepney,
When I am Old,
Ring the great Bells at Pauls.[5]

冒頭は "Two Sticks and an Apple"であり、現在よく知られている "Oranges and lemons" ではない。"Oranges and lemons"が登場するのは７行目になってからで、ここではまだ最後に「首をはねるぞ」という言葉はない。登場する教会または地名は８つである。現在最も標準版として流布しているオーピーの *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes (ODNR)* の唄と比較してみよう。

Oranges and lemons,
Say the bells of St. Clement's.

You owe me five farthings,
Say the bells of St. Martin's.

When will you pay me?
Say the bells of Old Bailey.

When I grow rich,
Say the bells of Shoreditch.

When will that be ?
Say the bells of Stepney.

I'm sure I don't know,
Says the great bell at Bow.

Here comes a candle to light you to bed,
Here comes a chopper to chop off your head.[6]

この版は「オレンジとレモン」で始まっているが、話題はすぐに金の貸し借りに移り、最後に「おまえの首をはねるぞ」という言葉で終わっている。教会の鐘が会話をしあうという設定は変わらないが、名前が挙げられている教会または地名は６つで、初出文献の８つよりも少ない。いずれの唄にも登場する名前は、St.Clemen(t)(s), Old Bailey, Stepneyの３

つだけである。その他はそれぞれ異なった教会または地名が登場している。文献に初めて登場した18世紀半ばから、オーピーが*ODNR*を編纂した20世紀半ばに至る200年のあいだに、"Oranges and Lemons"の唄がどのような変遷をたどったのか、次章で検討してみよう。

Ⅲ. "Oranges and Lemons"の唄の変遷

Tommy Thumb's Pretty Song Book vol.II (c. 1744)の次にこの唄が登場するのは、*The Top Book of All* (c. 1760)である。[7]（図版３）この本では１行目の言葉 "Two Sticks and an Apple"が唄のタイトルになっている。*Tommy Thumb's Pretty Song Book*の版と形式や内容は似ているが、いくつか異なった点がある。

(,)

But pray, ſays Tom, firſt kill
that Mouſe,
That eats my Cakes, and ſtinks
the Houſe.
Not I, ſays Jack, Lud, how it
frights,
Let's run away before it bites.

Nurſe Lovechild's *Story of*
JACKY NORY.

I'll tell you a Story, of Jacky
Nory,
Will you have it now or anon?
I will tell you another, of Jack
and his Brother,
And now my Story's done.

Two Sticks and an Apple.

Two Sticks and an Apple,
Say the Bells at Whitechapel:
Old

(10)

Old Father Bald Pate,
Say the Bells at Aldgate:
Maids in white Aprons,
Say the Beils at St. Catherine's:
You owe me ten Shillings,
Say the Bells at St. Hellens:
When will you pay me?
Say the Bells at the Old Bailey:
When I am rich,
Say the Bells at Shoreditch:
When will that be?
Say the Bells at Stepney:
I do not know,
Says the great Bell at Bow.

There were three jovial Welſhmen.

There were three jovial *Welſhmen*,
As I have heard many ſay,
And they would go a hunting
Upon St. David's Day;
All

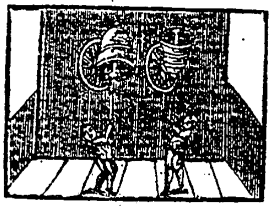
図版 3

まず、*Tommy Thumb's Pretty Song Book*では、"Ring the Bells at Whitechapple" というように "Ring"という言葉を使っていたのに対し、*The Top Book of All*では"Say the Bells at Whitechapel"というように教会の鐘が「鳴る」のではなく、「言う」とより擬人化した言い方をしている。その後はほとんどの版が"Ring"ではなく、"Say"の方をとっているのは興味深い。また、もうひとつ特筆すべきことは、現在この唄の呼び名にもなっている"Oranges and lemons"の言葉がこの版には登場しないことである。代わりに、"You owe me ten Shillings,/ Say the Bells at St. Hellens:"という行があり、最後は"I do not know,/ Says the great Bell at Bow."という終わり方になっており、"chop off your head"のフレーズはない。登場する教会、地名はWhitechapel, Aldgate, St. Catherine's, St. Hellens, Old Bailey, Shoreditch, Stepney, Bowの８つである。

次にこの唄が登場するのは*Tommy Thumb's Song Book* (1794) で、[8] これは初出文献の*Tommy Thumb's Pretty Song Book*の版をほとんど踏襲したものである。（図版４）タイトルのつけ方や挿絵の構図もそのままである。わずかに"Lemons"などとつづりが現代風に変わったこと、疑問符が使われていること、最後の行が"Ring the Great Bells at Paul's"に変わったことが相違点である。

26 TOMMY THUMB's

LONDON BELLS.



TWO Sticks and an Apple,
Ring the Bells at Whitechappel.
Old Father Bald Pate,
Ring the Bells at Aldgate.
Maids in white Aprons,
Ring the Bells at St. Catharines.
Oranges and Lemons,
Ring the Bells at St. Clemens:
When

SONG BOOK. 27

When will you pay me?
Ring the Bells at Old Bailey.
When I am rich,
Ring the Bells at Fleetditch.
When will that be?
Ring the Bells at Stepney.
When I am old,
Ring the Great Bells at Paul's.

CHARLESTOWN

図版 4

次にこの唄が登場するのは*Songs for the Nursery* (1805)である。[9] この版で登場する教会、地名は12で、長い版である。この唄は内容的には２つに分かれ、前半はお金の貸し借りの会話、後半はオレンジとレモン、やかんとなべのように、関連するものを２つづつあげ、ものづくしのような会話になっている。この点では文献初出のものとは順序が逆である。現代の版で冒頭になっている「オレンジとレモン」が登場するのは15行目である。

次に、*Gammer Gurton's Garland* (1810)を見てみよう。[10] 1784年の初版と1799年版にはこの唄は登場しない。1810年版では、"The Merry Bells of London"というタイトルがつけられている。

Gay go up and gay go down,
To ring the bells of London Town.

Bull's eyes and targets,
Say the bells of St. Marg'ret's.

Brickbats and tiles,
Say the bells of St. Giles.

Halfpence and farthings,
Say the bells of St. Martin's.

Oranges and lemons,
Say the bells of St. Clement's.

Pancakes and fritters,
Say the bells at St. Peter's.

Two sticks and an apple,
Say the bells at Whitechapel.

Old Father Baldpate,
Say the slow bells at Aldgate.

You owe me ten shillings,
Say the bells at St. Helen's.

When will you pay me ?
Say the bells at Old Bailey.

When I shall grow rich,
Say the bells at Shoreditch.

Pray, when will that be ?
Say the bells at Stepney.

I am sure I don't know,
Says the great bell at Bow.

この唄に登場する教会または地名は12で、ここで特徴的なのは、冒頭の前書き的な2行である。"Gay go up and gay go down,/To ring the bells of London Town"という2行からこの唄は始まる。内容は前半がものづくし、後半がお金の貸し借りとなっている。前書きの言葉は登場するものの、ここではまだ「首をはねるぞ」という終わりの言葉は登場しない。

次に、J.O.Halliwellの*The Nursery Rhymes of England* (1842) を見てみよう。[11] ここでは、唄の前に「"nursery dance"に合わせる唄」という注釈がある。登場する教会、地名は12で、前出の*Gammer Gurton's Garland*の版と、全文が同じである。編者のハリウェルはこの唄を採録するにあたり、*Gammer Gurton's Garland*から唄をとったものと思われる。ところが、オーピーの*ODNR*によると、2年後のハリウェルの1844年版では1842年版に比べると、St. John'sと St. Ann'sという2つの教会が増え、現代版の最後の「首をはねるぞ」という言葉がこの1844年版で登場していることがわかる。[12] これまでの版のなかで、1番長い版になる。1970年にThe Bodley Headから出版されたハリウェルの版に登場する教会、地名は14で、1844年版と同様である[13]

1847年に出版された*Nursery Ditties*[14] で登場するのは、St.John'sとSt. Ann'sが加わった14教会である。前書きの"Gay go up "と後書きの"Here comes a candle to light you to bed,/And here comes a chopper to chop off your head."という言葉もあり、ハリウェルの1844年版と同様である。

一方、1858年出版の Charles Bennett による *Old Nurse's Book* では、唄の冒頭が "Oranges and lemons"である。[15] 教会名、地名は6つしか登場せず、短い版である。

Oranges and lemons,
Said the Bells of St. Clement's.

You owe me five farthings,
Said the Bells of St. Martin's.

When will you pay me ?
Said the Bells of Old Bailey.

When I grow Rich,
Said the Bells of Shoreditch.

When will that be ?
Said the Bells of Stepney.

I do not know,
Said the great Bell of Bow.

Here comes a candle to light you to bed,
And here comes a chopper to chop-off-the-last-man's-head

(下線筆者)

最後の「首をはねるぞ」の部分が、オーピーの*ODNR*の版と比べると少し異なっている。ここでは"chop off your head"ではなく、"chop off the last man's head"である。現代版では「おまえがベッドに行くのを照らすろうそくですよ、(寝ないと)おまえの首をはねる首切り人が来ますよ」と、なかなか寝ない子をおどしつける内容であるのが、「最後の人の首をはねる首切り人が来ますよ」というふうに、よりゲームに密着した唄になっている。この"the last man"に変わったという点と、教会の鐘が"say"ではなく"said"と過去形を使っている点を除けば、「オレンジとレモン」という言葉で始まること、登場する教会、地名が同じであることなど、オーピーの版と共通しており、オーピーが*ODNR*を編纂する際、元にしたものの一つと推測される。

最後の部分がこの2種類の言い方を合わせたものに、Arthur Rackhamの*Mother Goose: The Old Nursery Rhymes* (1913) がある。[16)]

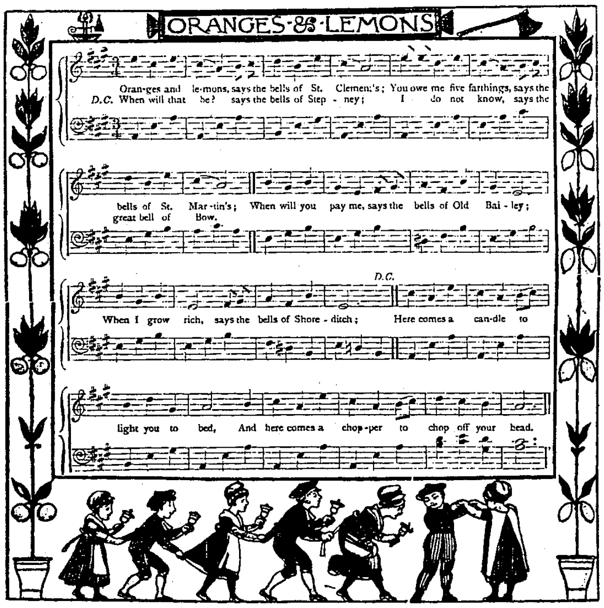
Here comes a candle to light you to bed,
And here comes a chopper to chop off your head.
Last, last, last, last, last man's head.

(下線筆者)

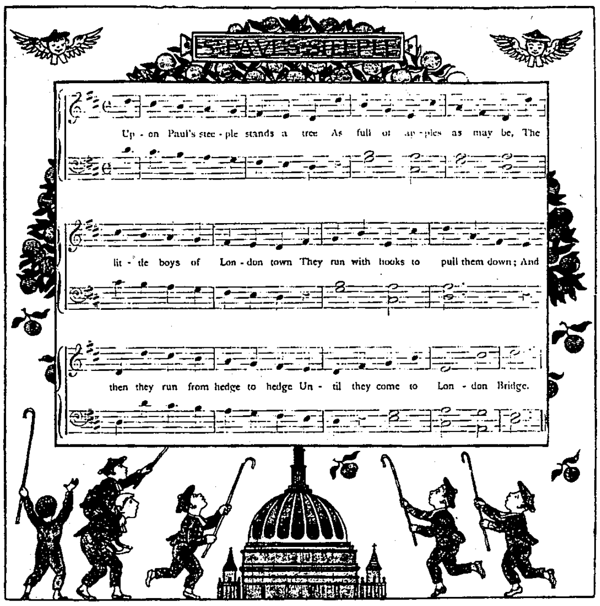
ここでは「おまえの首をはねるぞ」に「最後の人の首をはねるぞ」が続いている。実際の遊びのなかでは、このように2つ続けて歌われることもあったのであろう。

同年の1913年に出版されたFrederick Warne社のマザーグースの絵本*A Nursery Rhyme Picture Book*は数冊のシリーズ本だが、その1冊はタイトルが*Oranges and Lemons*で、冒頭にこの唄を収録している。[17)] この版では前書きにあたる"Gay go up"と後書きにあたる"Here comes a candle"もあり、登場する教会、地名は14である。ただし、「おまえの首をはねるぞ」のみで「最後の人の首をはねるぞ」という言葉はない。

1877年に出版された楽譜入りのマザーグース集、Walter Craneの*The Baby's Opera*は歌うことを目的としているためか、それほど長い版ではない。[18)] (図版5) "Oranges and lemons"で始まり、登場する教会、地名は6つで、St. Clement's, St. Martin's, Old Bailey, Shoreditch, Stepney, Bowの順であり、



12



13

図版5

これは1858年に出版されたベネットの*Old Nurse's Book*の版と同様である。最後の言葉が*The Baby's Opera*では "chop off your head" になっており、これはオーピーの*ODNR*の版と同様であるので、オーピーはこの唄を採録するにあたり、*Old Nurse's Book*と同様、*The Baby's Opera*の版も参考にした可能性はある。ただし、それぞれ、教会の鐘の音が「鳴る」が"said", "says","say"と異なっており、またBowの鐘がそれぞれ"I'm sure I don't know"、"I do not know"と鳴るなどと細かな相違点があり、同一ではない。

1878年にWard Lock社が出版した*Nursery Rhymes for Children*では、最初の前書き的な"Gay go up and gay go down"と後書き的な"Here comes a candle to light you to bed"の両者があり、"Oranges and lemons"で教会の鐘の会話は始まる。[19] 登場する教会、地名は14である。

オーピーはさきほど挙げた*ODNR*の他にもマザーグース集を出しているが、1955年の*The Oxford Nursery Rhyme Book*には*ODNR*の版とは異なる「オレンジとレモン」の版が収録されている。[20] *ODNR*の版よりも長く、前書き的な"Gay go up and gay go down"、後書き的な"Here comes a candle to light you to bed"があり、登場する教会、地名は14であるが、ハリウェルや他の版と、登場する教会名や順序はそれぞれ少しずつ異なっている。オーピーが1951年と1955年という近い時期に、一つの唄に対して異なった版の唄を編纂していたという事実は興味深いものがある。

以上のように概観してくると、この唄にはさまざまな版があり、いくつかに分類できることがわかる。まず、ハリウェルの1844年版の系列の14教会が登場する長い版と、ベネットの*Old Nurse's Book*の系列の6教会が登場する短い版とに分類することができる。また、形式の上では、鐘のやりとりだけのもの(I類)、鐘のやりとりに"Gay go up and gay go down"の前書きがつくもの(II類)、鐘のやりとりに"chop off your head"の後書きがつくもの(III類)、後書きと前書きの両方がつくもの(IV類)に分類できる。

さらに、鐘のやりとりの部分にもさまざまな出だしがあり、主なものを挙げると、最も初期の*Tommy Thumb's Pretty Song Book*(1744)の"Two sticks and an apple"で始まる唄のグループ(A群)、*Gammer Gurton's Garland*(1810)の "Bull's eyes and targets"で始まる唄のグループ(B群)、Charles Bennettの*Old Nurse's Book*(1858)の "Oranges and lemons"で始まる唄のグループ(C群)、*Songs for the Nursery*(1818)の "You owe me five shillings"で始まる唄のグループ(D群)などに分けることができる。

19世紀の絵本では、形式はIII類、あるいはIV類が多く、鐘のやりとり部分はB群とC群の唄が主流となったようである。そのなかで、III類のC群の版をオーピーが*ODNR*に採録することにより、それが現代版として定着したと思われる。さまざまな版のなかで、このオーピーの採った版は、登場する教会は6つと小規模で、冒頭は「オレンジとレモン」であり、最後は「おまえの首をはねるぞ」で終わる唄で、遊び唄としても覚えやすく、最も流布していたのであろう。オーピーが*The Oxford Nursery Rhyme Book*に採録した長い方の版は、ハリウェルの流れを汲むものだが、20世紀の絵本でこちらの版を採るものもある。20世紀の絵本にこの唄がどのような形で登場しているかについては、VII章で検討する。

それでは、教会の鐘が会話するという設定であるのにもかかわらず、話の中味は金の貸し借りであったり、ものづくしであったり、首切りであったりと、およそ宗教的とは言い難い会話の中味について次章で考察する。

IV. 教会の鐘の会話の背景

まず、唄に登場する教会について検討してみよう。文献初出が18世紀なので、なかには現代では特定しにくい教会もいくつかあり、現在では教会が残っていないものや、1つの教会に対して複数の教会が名乗りをあげているものもある。

オーピーの*ODNR*版に登場するSt. Clement's, St. Martin's, Old Bailey, Shoreditch, Stepney, Bowの6教会または地名は、シティー内部かそのすぐ外側に位置している。以下、*ODNR*と、Baring-Gouldの*The Annotated Mother Goose*に基づき、この6教会のモデルと考えられる教会について検討してみよう。[21]

「オレンジとレモン」と鐘が鳴るSt. Clement'sについては、St. Clement's, EastcheapとSt. Clement Danesの両者が、この唄に登場する教会は自分の方

だと主張している。前者は、地中海からの柑桔類が荷揚げされたロンドン橋のふもとのThames Street wharvesの近くに位置している。後者はストランドにあり、毎年3月31日に特別の礼拝を行い、牧師がオレンジとレモンを人々に配る。それぞれを支持する研究者もおり、特定するのは難しい。St. Martin's とはたぶんシティーのSt. Martin's Laneを指しているのだろうが、この通りには金貸しが多く住んでいた。Old Baileyは債務者が投獄されたFleet Prisonの近くである。Shoreditchには古い教会があったが、シティーの城壁のすぐ外側に位置していた。かつては劇場が多く、悪徳、不道徳の地として悪名高い地域であった。その近くのStepneyもやはりシティーの外側で、たぶんSt. Dunstan Churchを指しているのだろう。*Walks in London*の著者A.J.C. Hare (1834-1903)によると、この教会は「醜い煉瓦造りの家々のなかの緑のオアシス」であった。BowとはCheapsideのSt. Mary-le-Bowに違いない。ここの鐘の音は、後にロンドン市長になるDick Whittington少年に「戻っておいで」と聞こえた鐘であり、また、"Cockneys"すなわち生粋のロンドン子とは、この教会の鐘の音が聞こえる範囲内に住んでいる者と言われている。

以上のように見てくると、オレンジやレモンが荷揚げされた埠頭の近くの教会の鐘が"Oranges and lemons"と鳴り、金貸しが多く住んでいた通りの教会の鐘が"You owe me five farthings"と鳴り、債務者の投獄された監獄の近くの教会の鐘が"When will you pay me?"と鳴り、盛り場にある教会の鐘が"When I grow rich"と答え、ごみごみした街なかの教会が"When will that be?"と鳴り、ロンドン子の教会の鐘が"I'm sure I don't know"と鳴るのも納得できる。教会の鐘を擬人化しているわけだが、鐘の音はいわばその地域の人々の声を代弁しているかのようである。当時のロンドンの市井の人々の声、経済活動が活発で人々の往来でにぎわうシティー近辺の喧騒が、鐘の音を通して伝わってくるようである。

次に、「ベッドに行くのを照らすろうそくだよ。おまえの首をはねる首切り人が来るよ」というこの唄の最後の部分について検討しよう。これはそのままとれば、なかなか寝ようとしない子供をおどしつける言葉である。しかしそれにしても、首をはねるぞ、というのは残酷でもあり、いささか唐突でもある。この一節についてオーピーは次のように述べている。[22]

民俗学者のなかには、この首をはねるという言葉に血なまぐさい過去のなごりを見出し、さらに"London Bridge is Falling Down"の唄が過去の生贄になった人間のことを唄いこんでいるのと同様に、この"Oranges and Lemons"でも歴史のなかで処刑された人間のことを唄いこんでいると指摘する者もいる。罪人が公開処刑された時代は、死刑囚は教会のとむらいの鐘の音が響きわたるなかを、刑場へと引かれて行った。また、この唄のいくつかの言葉を、ヘンリー8世の何度にもわたる結婚と、またそのうちの何人かの妻の死とに結びつける説もある。いずれにせよ、教会の鐘は人間の結婚とも、また死とも結びついたものだといえる。

以上の観点から改めてこの唄の言葉と、また、このゲームのなかで最後の人間を両手を降ろして捕まえるという行為を考え合わせると、「ロンドン橋落ちた」と同様、この唄は「生贄あるいは犠牲者選び」という過去の暗い歴史を反映している側面もあると考えられる。

しかしながら、オーピーは、文献初出の版にはこの首切りの言葉は登場しておらず、後で付け加えられた可能性があること、また、"Oringes and Lemons"というのは1665年の文献にも登場するスクエアダンスの名前でもあることを指摘し、また、さらに、教会の鐘を擬人化して意味を読み込むことはよくあることであると述べている。[23]

次章では、オレンジとレモンといった関連した事物を列挙する、この唄のものづくしの側面について考察する。

V．ものづくしとしての"Oranges and Lemons"の唄

まず古い文献から検討してみよう。*Tommy Thumb's Pretty Song Book* (1744)では"Oranges and Lemons"の他に、"Two Sticks and an Apple", "Old Father Bald Pate", "Maids in white Aprons"の4組が登場している。*The Top Book of All* (c. 1760)と*Tommy Thumb's Song Book* (1788)でも同様である。*Gammer Gurton's Garland* (1810)では新たに、"Bull's eyes and targets", "Brickbats and tiles", "Halfpence and farthings", "Pancakes and fritters"が加わり、7組が登場する。*Songs for the*

Nursery (1818) では新たに"Kettles and pans", "Old shoes and slippers", "Pokers and tongs"が加わり、7組が登場する。ハリウェルの*The Nursery Rhymes of England* (1842) では7組が登場している。

オーピーはこの唄の2つの版を別々の本に採録していると先述したが、長い方の版を採録している*The Oxford Nursery Rhyme Book* (1955) では、"Bull's eyes and targets", "Brickbats and tiles", "Oranges and lemons", "Pancakes and fritters", "Two sticks and an apple", "Old Father Baldpate", "Maids in white aprons", "Pokers and tongs", "Kettles and pans"という最多の9組が登場している。[24] これらはいずれもそれまでの文献に登場したものであり、ここでまとめたものともいえる。ベアリング・グールドの*The Annotated Mother Goose* (1962) では、オーピーのものにさらに"Halfpence and farthings"を加えた10組が登場している。[25]

以上登場したものを分類してみると、オレンジやりんごやパンケーキなどの菓子や果物などの食べ物、神父や女中などの人物、標的の的などのおもちゃ、煉瓦のかけら、やかん、鍋、古靴、火掻き棒、火ばしなどの生活用品、半ペンスやファージングなどのお金などに分類することができる。いずれも子供にとって親しみやすく、身近なものである。お金の金額をみても、半ペンスやファージングと小額であり、子供にとっては身近な額である。これらは、子供達が実際に歌う際、身のまわりの中から事物を選びだして唄に取り入れた言葉、いわば、遊びのなかから生まれてきた言葉と考えることも可能である。

次章では、地方によるこの唄のさまざまな版について検討しよう。

VI. 地方による"Oranges and Lemons"の唄

A.B.Gommeの*The Traditional Games of England, Scotland, and Ireland* (1964) ではこの唄の16の版を紹介している。ロンドン、ノッティンガムシャー、ダービシャー、ミドルセックス、ドーセット、ヨーク、サリー、パースなど、イギリス各地から収集したものである。[26]

16の版のうち"Orange(s) and lemon(s)"あるいは"Orange or lemon"で始まるのは13である。残る3つの版にはこの言葉は登場しない。また、唄の最後に「首をはねるぞ」という言葉が登場するのは、16のうち11である。うち1つは「つきとばすぞ」という言葉になっている。教会の鐘の会話の中味は金の貸し借りが主なものだが、なかには"Oranges and lemons"だけではなく、"Brickdust and tiles", "Pancakes and fritters"などが登場する版もある。

教会名で見ると、ロンドンの複数の教会名をそのまま踏襲している版は16のうち6つだけで、あとは最初のSt. Clement'sまたはSt. Martin'sのどちらかだけが登場する版が7つ、教会名が全く登場しない版が1つ、そしてロンドンの教会名ではなくその地方の教会名が登場する版が、ヨークとノーサンプトンシャーの2つある。

以上のように見てくると、この「オレンジとレモン」の唄はイギリス全土に伝わる際に、教会の鐘が会話をするという枠組みは変わらないものの、ロンドンの教会名はさほど重要な要素ではなく、むしろ「オレンジとレモン」という言葉で始まり、その後話題は金の貸し借りに移り、最後は「首をはねるぞ」というパターンをふむのがゲームの唄として最も一般的に流布したものであったことがわかる。このA. B. Gommeの書が出版されたのは1964年であるので、20世紀半ばのイギリス各地で、「オレンジとレモン」の唄はこのような形で歌われていたことになる。

VII. 20世紀の絵本における"Oranges and Lemons"の唄

次に、20世紀に出版された絵本のなかで、「オレンジとレモン」の唄がどのように登場しているか見てみよう。

概観すると、20世紀初頭から半ばに出版された絵本は、"Gay go up and gay go down..."の前書きがつき、また鐘のやりとり部分に登場する教会の数は10から16と多い。一方、20世紀後半に出版された絵本は、鐘のやりとりだけか、または鐘のやりとりに加えて"Here comes a candle to light up you to bed..."の後書きがつき、登場する教会の数は6と少ない傾向がある。これは、1951年に、短い版を収録しているオーピーの*ODNR*が出版されたことも一因であろう。1950年代を境に「オレンジとレモン」の唄は短い版が主流となったといえる。

10から16の教会が登場する唄を収録している絵本には、次のものがある。出版年順に並べ、登場する

教会の数をかっこ内に記す。H. W. Le Mairの*Auntie's Little Rhyme Book*(1913)(12教会),[27] Lawson Woodの*The Old Nursery Rhymes*(c. 1920)(14教会),[28] Ernest Nisterの*Mother Goose's Nursery Rhymes*(1922)(14教会),[29] Alice Daglishの*The Land of Nursery Rhyme*(1938)(12教会),[30] Enid Markの*A Book of Nursery Rhymes*(1939)(10教会),[31] Horace Mansion and Anne Andersonの*Old English Nursery Songs*(n.d.)(12教会),[32] Frank Adamsの*Mother Goose and Other Nursery Rhymes*(n.d.)(15教会),[33] Kathleen Linesの*Lavender's Blue*(1954)(14教会),[34] Iona and Peter Opieの*The Oxford Nursery Rhyme Book*(1955)(14教会),[35] Raymond Briggsの*The Mother Goose Treasury*(1966)(14教会)、[36] William S. Baring-Gould and Ceil Baring-Gouldの*The Annotated Mother Goose*(1962)(16教会)[37] などである。

一方、6つの教会が登場する唄を収録している絵本には、次のものがある。H. K. Mooreの*The Nursery Song Book*(c.1920),[38] Iona and Peter Opieの*The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*(*ODNR*)(1951), Brian Wildsmithの*Mother Goose*(1964),[39] Ian Beckの*Oranges and Lemons : Singing and Dancing Games*(1985),[40] Sally Emersonの*The Kingfisher Nursery Treasury*(1988),[41] Nancy Larrickの*Songs from Mother Goose : With the Traditional Melody for Each*(1989),[42] Jonathan Langleyの*The Collins Book of Nursery Rhymes*(1990),[43], Ian Pennyの*The National Trust Book of Nursery Rhymes*(1994)[44] などである。

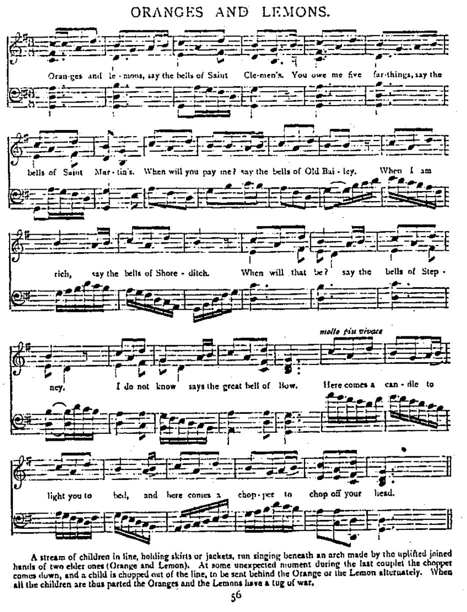
20世紀前半の絵本では、登場する教会の数はさまざまで順序も一定ではないが、20世紀後半の絵本では、教会の数も順序もほぼ同様で、オーピーの*ODNR*の版にならっている。

20世紀の絵本の特徴として挙げることができるのは、本文をのせるだけでなく、具体的な遊び方のわかる挿絵がついていたり、楽譜つきでメロディーを紹介したり、遊び方の詳しい説明をのせている本がいくつかあることである。[45](図版6、7、8参照) 18世紀、19世紀に比べ、この唄の「遊び」の要素をより重視していることがわかる。

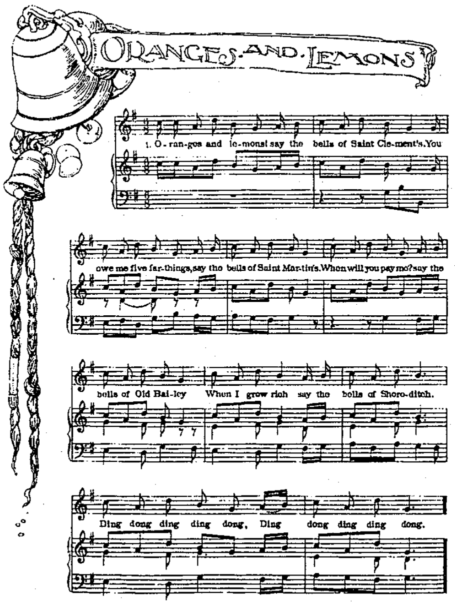
VIII. "Oranges and lemons"の唄のおもしろさ

二世紀以上の時の経過のなかで「オレンジとレモン」の唄には多くの版が生まれたことがわかった。この唄が今もなお色あせることなく子供に親しまれている理由を考えてみると、この一見単純な唄に、さまざまな要素が含まれているからではないだろうか。

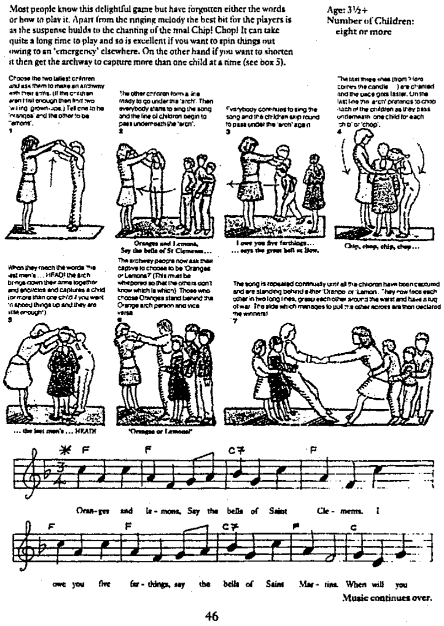
まず、教会の鐘が会話するという枠組み自体が興味深いものだが、鐘の会話という単純な形式の繰り



図版6



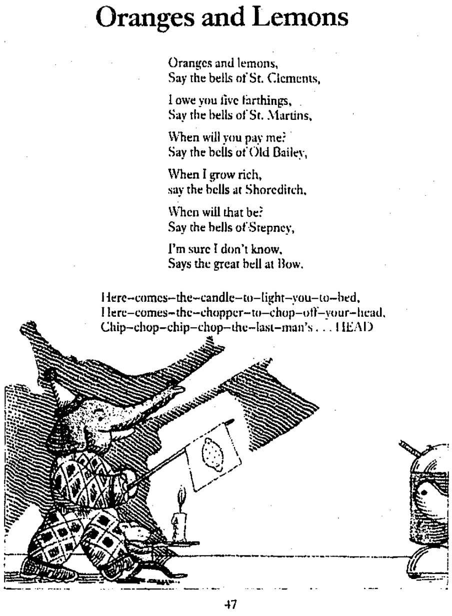
図版 7


Most people know this delightful game but have forgotten either the words or how to play it. Apart from the ringing melody the best bit for the players is as the suspense builds to the chanting of the final Chip! Chop! It can take quite a long time to play and so is excellent if you want to spin things out owing to an 'emergency' elsewhere. On the other hand if you want to shorten it then get the archway to capture more than one child at a time (see box 5).

Age: 3½+
Number of Children:
eight or more

Orang-ges and le-mons. Say the bells of Saint Cle-ments. I
owe you five far-things, say the bells of Saint Mar-tins. When will you
Music continues over.

46


Oranges and Lemons

Oranges and lemons,
Say the bells of St. Clements,

I owe you five farthings,
Say the bells of St. Martins,

When will you pay me?
Say the bells of Old Bailey,

When I grow rich,
say the bells at Shoreditch,

When will that be?
Say the bells of Stepney,

I'm sure I don't know,
Says the great bell at Bow.

Here-comes-the-candle-to-light-you-to-bed,
Here-comes-the-chopper-to-chop-off-your-head,
Chip-chop-chip-chop-the-last-man's . . . HEAD

47

図版 8

返しのなかで、子供にとって身近なものを次々と繰り出し、列挙していくおもしろさ、ロンドンめぐりでもしているような教会名の列挙のおもしろさ、「お金を貸した」とか「いつ返すのか」、「わからない」などといった現実的な会話のやりとりのおもしろさがある。それだけでなく、「首をはねるぞ」といった唐突な残酷さ、それにまつわる歴史的背景への連想、さらに、「誰かが捕まる」というスリルを伴うゲーム、そして、美しく単純で覚えやすいメロディーなどと、さまざまな要因を挙げることができる。

1744年頃に出版された最初の本格的なマザーグース集*Tommy Thumb's Pretty Song Book*を現代の我々が読み返してみると、現代の選集や絵本で見ることはおろか、オーピーの*ODNR*にも採録されておらず、日常的にも聞いたことがない唄がいくつかあることに気づく。現代ではもう忘れられてしまったか、あるいは時代のなかで意図的に排除されてしまった唄である。そのような唄がある一方で、この「オレンジとレモン」の唄は時代や地方によって形を変え、長さを変え、言葉を変えながら子供達に歌い継

がれ、人々のなかで生き続けてきた唄であると言えるだろう。

George OrwellのNineteen *Eighty-Four* (1949)では、登場人物の会話の中で、教会の名前からこの唄のフレーズが浮かび、さらに子供時代の回想やロンドンの古い建物へと連想がつながる場面がいくつかある。そして"Oranges and lemons"や最後の「首をはねるぞ」というフレーズが何度か登場し、効果的に使われている。[46] "Oranges and lemons"の唄は、人々の共有する古い時代、そしてまた子供時代を象徴する唄でもある。

注)

1) Alice Bertha Gomme, *The Traditional Games of England, Scotland, and Ireland*, vol. II (New York: Dover Publications, 1964), pp. 25－35.
2) Iona and Peter Opie, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* (1951; rpt. Oxford: Oxford University Press, 1984), pp.337－339.
3) *Ibid*.,p.275.
4) *Tommy Thumb's Pretty Song Book* Vol. II (London: M. Cooper, c.1744), p.50.
5) 原文で古い活字を使っているところは、現代の活字に直してある。また、オーピーは、この唄を*ODNR*に載せる際、最初の1行目と最後の16行目で活字を見落としているところがあるが、筆者は1行目には"an", 16行目には"great"があると考える。Opie, *ODNR*, p.338と 図版2を参照のこと。
6) Opie, *ODNR*, p.337.
7) *The Top Book of All, For Little Masters and Misses* (London: Crowder, Collins, and R. Baldwin, c. 1760), pp.9－10.
8) *Tommy Thumb's Song Book, For All Little Masters and Misses* (Worcester: Isaiah Thomas, 1788), pp.26－27. ほるぷ出版から復刻版が出ている。
9) *Songs for the Nursery, Collected from the Works of the Most Renowned Poets*, (1818; rpt.London: William Darton, 1822), pp. 48-49.
10) *Gammer Gurton's Garland: or the Nursery Parnassus* (London: R. Triphook, 1810),pp. 28－29. ほるぷ出版から復刻版が出ている。
11) James Orchard Halliwell, *The Nursery Rhymes of England* (London: The Percy Society, 1842), pp.111－112. ほるぷ出版から復刻版が出ている。
12) Opie, *ODNR*, p. 339.
13) James Orchard Halliwell, *The Nursery Rhymes of England* (London: The Bodley Head, 1970), pp. 117－118.
14) *Nursery Ditties, From the Lips of Mrs. Lullaby* (London: Grant and Griffith, 1847), pp. 11－13.
15) Charles H. Bennett, *Old Nurse's Book: Rhymes, Jingles and Ditties* (London: Griffith and Farran, 1858), pp.26－27. ほるぷ出版から復刻版が出ている。
16) Arthur Rackham, *Mother Goose: The Old Nursery Rhymes* (London: William Heinemann, 1913), pp. 86－87. ほるぷ出版から復刻版が出ている。
17) Leslie Brooke, *Oranges and Lemons: A Nursery Rhyme Picture Book* (London: Frederick Warne, 1913), pp.1－2. ほるぷ出版から復刻版が出ている。
18) Walter Crane, *The Baby's Opera: A Book of Old Rhymes with New Dresses* (London: George Routlege and Sons, 1877), p.12. ほるぷ出版から復刻版が出ている。
19) *Nursery Rhymes for Children* (London: Ward, Lock, and Co., 1878), pp.6－7.
20) Iona and Peter Opie, *The Oxford Nursery Rhyme Book* (1955, rpt. Oxford: Oxford University Press, 1992), p.68.
21) Opie, *ODNR*, p339, William S. Baring-Gould and Ceil Baring-Gould, *The Annotated Mother Goose* (New York: Bramhall House, 1962), pp.252－256.
22) Opie, *ODNR*, p.338.
23) Opie, *ODNR*, p.338.
24) Opie, *The Oxford Nursery Rhyme Book*, p.68.
25) Baring-Gould, *The Annotated Mother Goose*, pp.253－254.

26) Gomme, *The Traditional Games of England, Scotlamd, and Ireland*, pp.25－35.
27) H. Willebeek Le Mair, *Auntie's Little Rhyme Book: No. 3 of Old Nursery Rhymes* (London: Augener Ltd.1913). ほるぷ出版から復刻版が出ている。
28) Lawson Wood, *The Old Nursery Rhymes* (London: Thomas Nelson and Sons, c. 1920), pp. 137－138.
29) Ernest Nister, *Mother Goose's Nursery Rhymes* (1922, facsimile edition published by Chancellor Press, London, 1986), p.29、p.31.
30) Alice Daglish and Ernest Rhys, *The Land of Nursery Rhyme* (London: J. M. Dent & Sons, 1938), p. 109. この版は、鐘の会話の部分に引用符が使われ、前半に6教会、後半に6教会が登場し、"Here comes a candle to light you to bed !..."が真ん中と最後に2回繰り返されるという珍しい版である。
31) Enid Mark, *A Book of Nursery Rhymes* (London: Chatto and Windus, 1939), p. 22.
32) Horace Mansion, *Old English Nursery Songs* (London: George G. Harrap, n.d.), pp.9－11. この版では"Here comes a candle..."の代わりに、"Ding dong, ding ding dong,"が登場する。また、子供達がアーチをくぐっているこの唄の遊び方を描いた挿絵には、日本の堤灯が描かれており、日本趣味が見られる。(図版7参照)
33) Frank Adams, *Mother Goose and Other Nursery Rhymes* (London: Blackie and Son, n. d.).
34) Kathleen Lines, *Lavender's Blue: A Book of Nursery Rhymes* (1954, rpt. London: Oxford University Press, 1992), pp. 132－133.
35) Opie, *The Oxford Nursery Rhyme Book*, p. 68.
36) Raymond Briggs, *The Mother Goose Treasury* (London: Hamish Hamilton, 1966), pp.138－139.
37) Baring-Gould, *The Annotated Mother Goose*, pp.253－254.
38) H. Keatley Moore, *The Nursery Song Book* (London: George Routlege & Sons, c. 1920), p. 56.
39) Brian Wildsmith, *Mother Goose* (Oxford: Oxford University Press, 1964), pp.78－79.
40) Ian Beck and Karen King, *Oranges and Lemons: Singing and Dancing Games* (Oxford: Oxford University Press, 1985), pp. 46－48. 挿絵で、象の持つ旗の影が「おの」になっていることに注意。
41) Sally Emerson, *The Kingfisher Nursery Treasury* (London: Kingfisher Books, 1988), p. 66.
42) Nancy Larrick, *Songs from Mother Goose: With the Traditional Melody for Each* (Harper & Row, Publishers, 1989), p. 31.
43) Jonathan Langley, *The Collins Book of Nursery Rhymes* (London: Collins, 1981), p. 29.
44) Ian Penny, *The National Trust Book of Nursery Rhymes* (London: The National Trust, 1994), p.26.
45) いくつか例をあげると、H. Keatley Mooreの *The Nursery Song Book* (楽譜、挿絵、説明つき、図版6)、Horace Mansionの *Old English Nursery Songs* (楽譜、挿絵つき、図版7)、Ian Beckの *Oranges and Lemons* (楽譜、挿絵、説明つき、図版8) などがある。
46) Opieも指摘しているように、George Orwell, *Nineteen Eighty-Four* (1949, rpt. Oxford University Press, 1984)のなかにこの唄は何度か登場する。Opie, *ODNR*, p.339.

図版1 Alice Bertha Gomme, *The Traditional Games of England, Scotland, and Ireland*, Vol.II
図版2 *Tommy Thumb's Pretty Song Book*, Vol.II
図版3 *The Top Book of All*
図版4 *Tommy Thumb's Song Book*
図版5 Walter Crane, *The Baby's Opera*
図版6 H. Keatley Moore, *The Nursery Song Book*
図版7 Horace Mansion, *Old English Nursery Songs*
図版8 Ian Beck and Karen King, *Oranges and Lemons*